

## 空手道詳説（14）

### 第2章 沖縄史の概説

#### 4 沖縄史の概略（その3. 第二尚氏王統の誕生）

##### (7) 尚円王を取り巻く歴史の虚実

この項で書く記述は、琉球（沖縄）の正史から外れた内容となるので、琉球史研究家から叱責されるのは覚悟の前である。書きたかった理由として、神話的な時代のところは仕方ないとしても、大和（日本）なら南北朝時代が終わり戦国時代に入る前ころに相当する第二尚氏王統発生当初の記載で、尚円王を取り巻く歴史物語だけは、どうにも腑に落ちないところが多かった。

これから書く部分は、筆者は参考とした資料を明らかにしないままに進めることご容赦いただきたい。だだ、神人（カミンチュウ）という神や霊に仕える霊能者の一人とだけ言っておこう。

沖縄県人のうち多くの人とたちが、沖縄正史として伝わるものに対し筆者と同じような疑念を持ち、もっと違う裏があるのではと思う人がいるかもしれない。

それは、沖縄県教育委員会が記した前述(5)の中山世鑑「あとがき」部分の微妙なニュアンスであり、元法政大学沖縄文化研究所所長・比嘉実氏の論文における『琉球王統譜・神号の思想的研究』の「はじめに」にある記述である。

正史の王朝の交替についての記述は具体的な歴史上の事実を何ひとつとして正確に記録していないに違いない。それは歴史の粉飾でもない。粉飾にしては余りに事実から、具体的な歴史の実相からかけはなれているように思われるのである。

これらは、必ずしも中山世鑑の全体が、粉飾ないしは捏造されたものであるという論法に直結しないが、正史以外に伝わった歴史物語が長く人々の記憶の一部にあったこと見逃すわけにはいかない。

したがって、以下に書く全てが真実なのか仮想の物語なのか、それとも俗説なのか確かめる術がないまま、今回文字にすることお断りしておく。

#### ア 尚円王の出自

(2)のところで、「尚円と出生等の疑問」(6月分)として筆者が提起した疑問点を思い起こしていただきたい。

その疑問とは、第一には、彼(金丸、後の尚円王)が伊是名島の農民出身だったのかということ。第二には、王府役人として尚泰久(第一尚氏王統の第6代王)に見い出された器量は、いつ何処で身に付けたのだろうか、であった。

尚円の即位より遅れること約120年、農民出身者ながらに閏白まで昇りつめた豊臣秀吉(1537~98年、戦国時代天下人となり、後に豊太閤と呼ばれた)の例があるから、農民出身者が王になれない理由にはならない。

話を進めるに当たり、歴史経過を整理すると、

- ・尚円王が即位したのは1469年
- ・薩摩藩による琉球侵攻は、1609年
- ・第二尚氏王統第10代の尚質王の命により、羽地朝秀は中山世鑑を編纂し完成したのは1650年。

中山世鑑が人々の目に触れるこの時期、琉球国は薩摩藩の侵攻から敗れて40年、ごり押しされた政策に対する困惑と膨大な借財を抱え、国は上下を挙げて苦難の途上にあった。

長秀が史書編纂に際し先ず重視したのは、現実的な薩摩藩の支配を肯定せざるを得ないという時代背景である。

日本(大和)と琉球の同一祖先論と、薩摩に対する気遣いに満ちた編纂記述は、朝秀の苦衷を見ることでできよう。薩摩は富の搾取と併せて、文化の篡奪をはじめたのも理由の一つにあったかもしれない。

考えらえることは、

- ・尚円王以前の玉陵(たまうどうん、歴代王の墓)は隠しようもないが、伊是名島の農民出身者とすれば、尚円王の墓がないと言い訳できる。
- ・第一尚氏発祥の地である伊平屋島の隣にある伊是名島で尚円の生れとすることで、東南アジアが共通して持つ「易姓革命」の思想を横睨みしつつ、両王統に何らかのつながりがあると示唆した。

では、尚円王の真実の出自はどのようなものだったか。次の説が浮かび上がる。

金丸は、代々今帰仁(まきじん)に住む生粋の琉球人で、一族は官吏として今帰仁城に勤めていた。一族の墓は王族の家格を示すように、立派なシーサーが置かれた豪勢なものであった。沖縄島北部を守る今帰仁領主(按司)に次ぐ家格にあったのだろう。

未だ越来王子と呼ばれていた頃の尚泰久は、金丸の卓抜した手腕と才能に着目し、この男ならと今帰仁領主に頼み臣下に加えた。金丸27歳の時である。

金丸は妻と15歳年下の弟(後の尚宣威王)を伴って首里に赴き、首里の近くに居所を構え、妻や子供、弟と共に幸せに暮らした。

越来王子に仕え全幅の信頼を得た金丸は、家臣となって10年目に尚泰久王が誕生すると重要ポストを次々歴任し、自らの領地を与えられたことは、「(1)金丸と第二尚氏王統の誕生」のところで書いた。

とすると、一気に二つの疑問は解決される。金丸は幼少時からしかるべき教育を受け、父祖の後姿を見て育ったのである。



今 帰 仁 城 址

## イ 尚円王と妃の宇喜也嘉

第一尚氏王統最後の王となったのは尚徳王で、陰謀がらみで王位に着くが、史書は悪政が続いたと記している。ほとんどの王権交替劇は、前王の暴挙や非道が綴られるのが常道であって、尚徳王の場合も例外でない。

人民は新しい王（尚円）を迎えるや、巷の空気は一変し、第一尚氏時代に阻害され逼塞を余儀なくされていた人々が復権を果たす。

中山世鑑は、尚円王の善政を讃えるが、在位したのは僅か足掛け7年である。しかし、19代に及ぶ王を生み、400余年の長期王権を維持する基礎を確立した業績は、尚円王ならではの感がある。

27歳（数え年）の時、越来王子（後の泰久王）に見い出され重用された金丸時代の尚円の経緯は、ア、に書いたとおりである。しかし、正史の表舞台には、尚円王糟糠の妻である夫人や子供は全く出てこない。強調されているのは、妃・宇喜也嘉だけであるから不思議なものだ。

大事なことから、尚円王に関連するところ、正史から時系列で拾ってみると次になる。尚円の年齢は数え年である。

事	象	西 暦	尚円年齢	備 考
尚円王（金丸、童名・思徳金）出生。		1415年	1歳	
金丸の両親が死亡。		1436年	22歳	
金丸、伊是名島を出奔、国頭村に移住。		1438年	24歳	
金丸、首里に出て、越来王子の家臣となる		1441年	27歳	

金丸、黄冠に昇る。	1452年	38歳	
越来王子が第一尚氏王統第6代泰久王となる。	1453年	39歳	
金丸、西原間切の内間領主に任命される。	1454年	40歳	
金丸、御物城御鎖側官（貿易長官）に就任。	1459年	45歳	
尚泰久薨去、尚徳王即位。	1460年	46歳	
真加戸樽金（後の尚真王）出生、母・宇喜也嘉。	1465年	51歳	
金丸、尚徳王を批判、西原間切に隠遁する。	1468年	54歳	
尚徳王が薨去し、金丸が尚円を名乗り即位。	1469年	55歳	第二尚氏成立
尚円王薨去、第二代王に弟の宣威が即位	1476年	61歳	
宇喜也嘉が新王の是非を占う神事占いを行い、宣威が退位	1477年		
尚円王の世子真加戸樽金が尚真王に即位	1477年		

尚円王の妃は世添大美御前加那志（1445～1505年。前名・宇喜也嘉で記す）で、他に3人の側室がいた記録に残る。3人の側室は氏素性が分かるのに、宇喜也嘉だけはつきりしない。王府士族の出であるようだが、養子縁組の形で士族の出自を作ったかどうかとも分からない。

尚真王が生まれたのは1465年で尚円王は51歳であるから、西原間切の内間領主と呼ばれていた時代となり、宇喜也嘉は21歳である。領主（殿様）なら妃を含め側室がいても不思議はないが、中でも宇喜也嘉は最も若く、尚円王は年老いてから生まれた樽金と共に殊更寵愛したのであろう。

そこで筆者は、以下のとおり暗闇の中から這い出るような、臆説とも俗説ともつかない一つの仮説を立てた。

宇喜也嘉が生んだ樽金の誕生は、既に孫もいた尚円であったがとても喜び、一層宇喜也嘉を寵愛した。

尚円が55歳で王となると、宇喜也嘉をはじめ側室など、首里に移り王宮に入る。糟糠の妻（夫人）と子、孫は内間御殿に残るといふ、そんな控え目な家族であった。

一方で宇喜也嘉は、一筋縄でいくような女ではなく、「外面如菩薩、内面如夜叉」を地で行く野望と悪略を充満させた女であった。

後宮に入った宇喜也嘉は、我こそ正妃となって、我が子を世継ぎにせんと強く決意し、邪魔者は排除しなければならないと、王の目に届かるところでなりふり構わぬ策謀がはじまった。最初に標的としたのは、尚円と長年苦楽を共にした内間に住む夫人とその家族であった。夫人たちが王宮に入れば発言力は絶大となり、宇喜也嘉と樽金の地位を脅かし、野望が潰えないとも限らない。

遂に、宇喜也嘉は尚円に覺られないよう密かに夫人のところに使者を送って駕籠を差し向け、『首里城にお迎えするので家族全員で来てほしい』と伝えさせた。

夫人と一家は、王宮からの出向いとあれば疑いの心もなく、身支度を整えて駕籠に乗った。

ところが駕籠の向かった先は、王宮ではなく人気のない海辺であった。樹木の陰から出てきた刺客たちは、駕籠を取り巻き退路を断った。

この事件を聞いた尚円王は、言うまでもなく大きな衝撃と落胆の極みに陥ったが、元凶が宇喜也嘉だなど思いもよらないことであった。

推されて王位（第二尚氏王統初代王）に着いたことになっていても、当時の世情から犯人は第一尚氏の残党だろうと信じ込んでしまった。世相の不安定さを巧みに利用した、悪知恵に長けた宇喜也嘉の仕業であった。

しかし、こんな大事を仕出かすには女手一つでは難しい。首里士族の中には、尚円王の出自のところで書いたように、彼は旧北山の今帰仁城官僚出身である。その後の勢力が北山勢に主導権が握られるのを嫌った首里官僚の中には、下級役人の娘である宇喜也嘉を妃にし、樽金を次代の王位に着きたい勢力もあったであろう。

このように大きな犠牲を出しながら、それでも事はすんなりと運ばなかった。足掛け7年の在位をもって尚円は61歳で薨去したからである。当時の平均寿命なら、61歳でも仕方ないことであろう。

尚円王の薨去時、樽金は未だ11歳の若年であることから、尚円王が言い残した『樽金は未だ若い。次期王は宣威がよかろう』から、尚円の弟宣威が王となって即位してしまったからである。

(つづく)

参考文献等（発行年月は著書に記載のまま）

- ・ 宮城栄昌著「沖縄の歴史」、昭和43年11月26日初版、日本放送出版協会発行
- ・ 新里恵二著「沖縄史を語る」、1970年9月1日初版、株勁草書房発行
- ・ 池田奉秀著「古流現代空手道集義第一巻」、昭和50年7月25日初版、日本空手道常心門出版部発行
- ・ 喜納大作、上里隆史共著「琉球王国のすべて」、2012年6月20日初版、株河出書房新社発行